



武田交來録
揚洲周延画

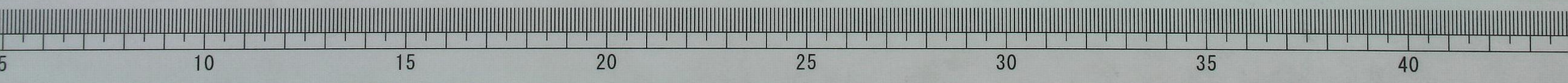
倭洋妾横濱美談
三冊目之切

下之卷

中之卷

錦壽堂様

上之卷





錦壽堂 梓

上之巻

倭洋妾横濱美談
三冊 四

10

15

20

25

4528

倭洋妾

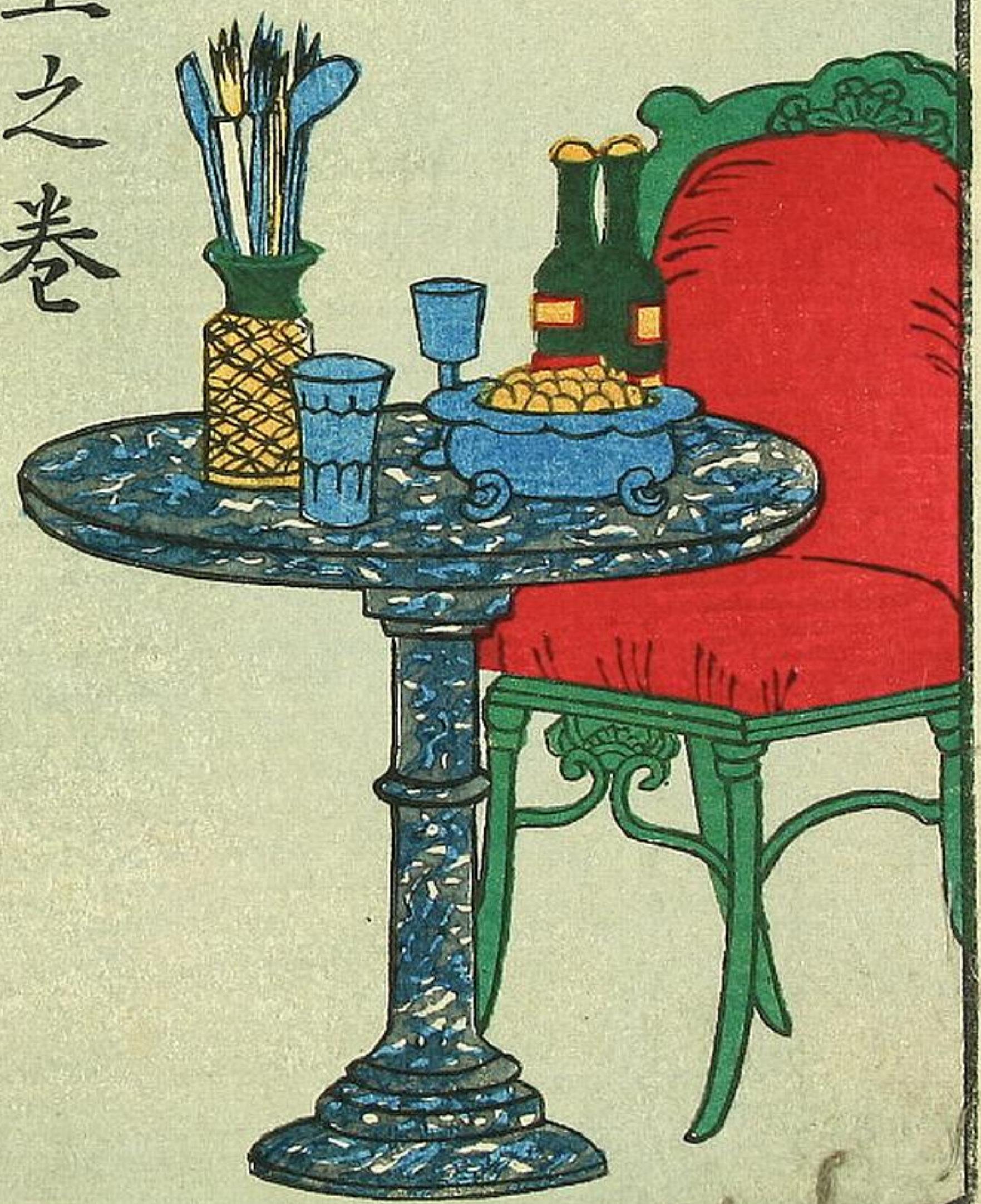
横濱

美談

上之卷

周延画

錦壽堂梓



和洋妾横濱美談之序

日來東京繪入新聞紙小横濱居留地の商館多何某が
 洋妾於歌於芳の事跡と記し下婢お松が忠勇の功を奉
 く江湖婦女子乃教戒と以嗚呼か歌が淫毒於芳が貞節
 両婦が善惡黑白と新紙小照ら鏡山二代の初とも云つ
 處を於松が忠義を稗史に以て先勸懲法一助となさんと
 書肆の贖求り魁蕃子の文意を其終録せと志する

干時明治十四年一月

山閑人交來記



48-8378

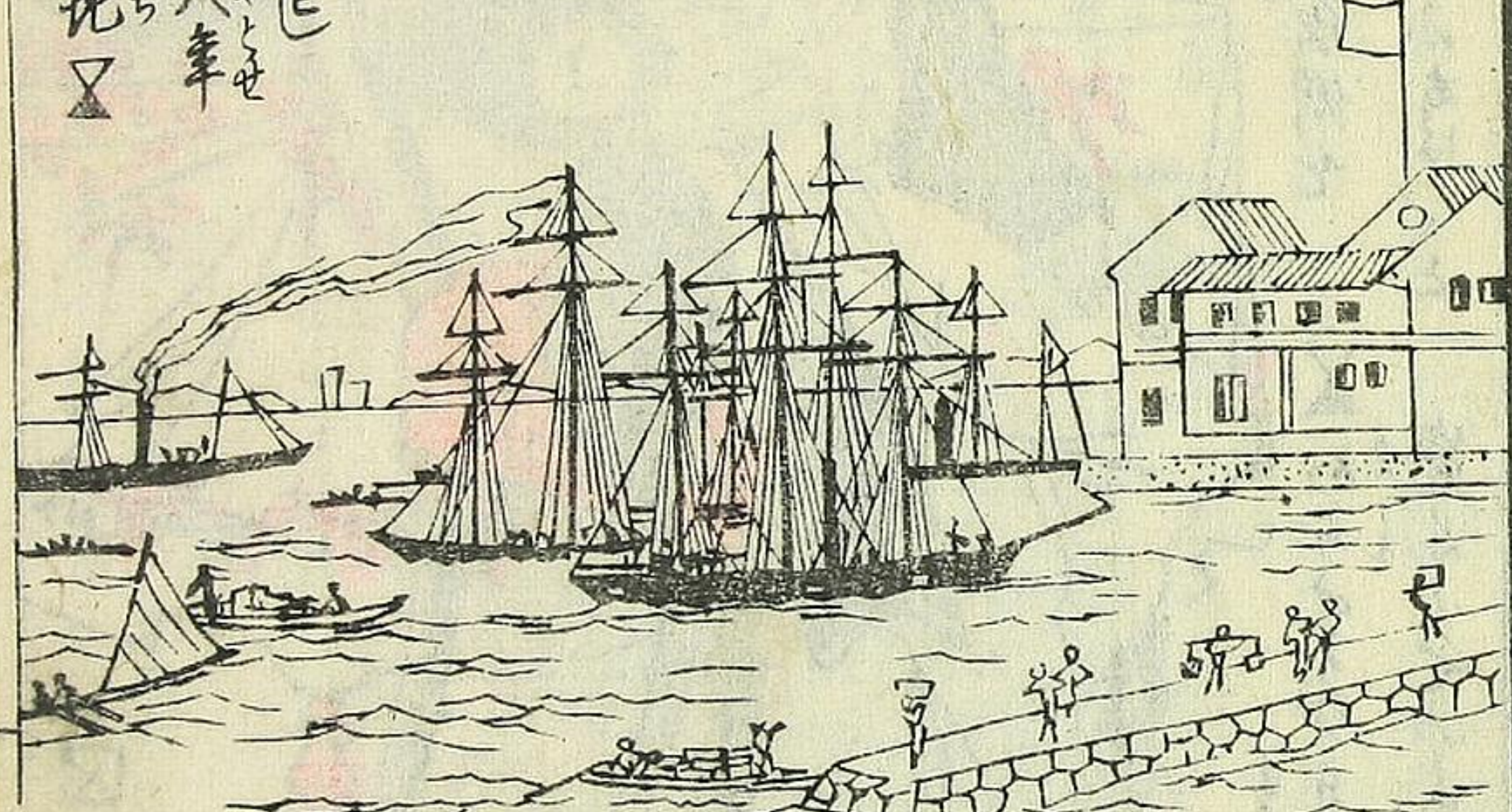


永洋コ妻



下婢於松

其報章の准も知る開化の
 さだかけ横濱の敷ある所の
 中相生所の式丁目小
 宿おらうことい婦人へは
 二十と一ツ城へ籠る容貌
 別嬪と述傳の若の洋判
 ありしが居る北百何妻後
 なる英人コレンス何何うえ
 初め月々二十四のきあ
 あく洋妾とほて宛後世
 うかあうとも是那と大切八年
 け寄つとあて居るさく居る地



大あね人討か
 以給コレンスの
 嵐をやどとて
 男の児まて
 由産まあと
 せし由倍と
 等しく宛後
 さくはるま
 永く宛後
 あく居る
 甲斐交もく大



つぎ 旦那
 小言く
 取入る
 園扇へ
 まりつて
 彼見と
 びの 後 竹とま
 とま 暇めりの
 旦那さん 八重の葉
 例へあきふまははる
 けまが二月三月からつて
 麻針指のど 懸はとも

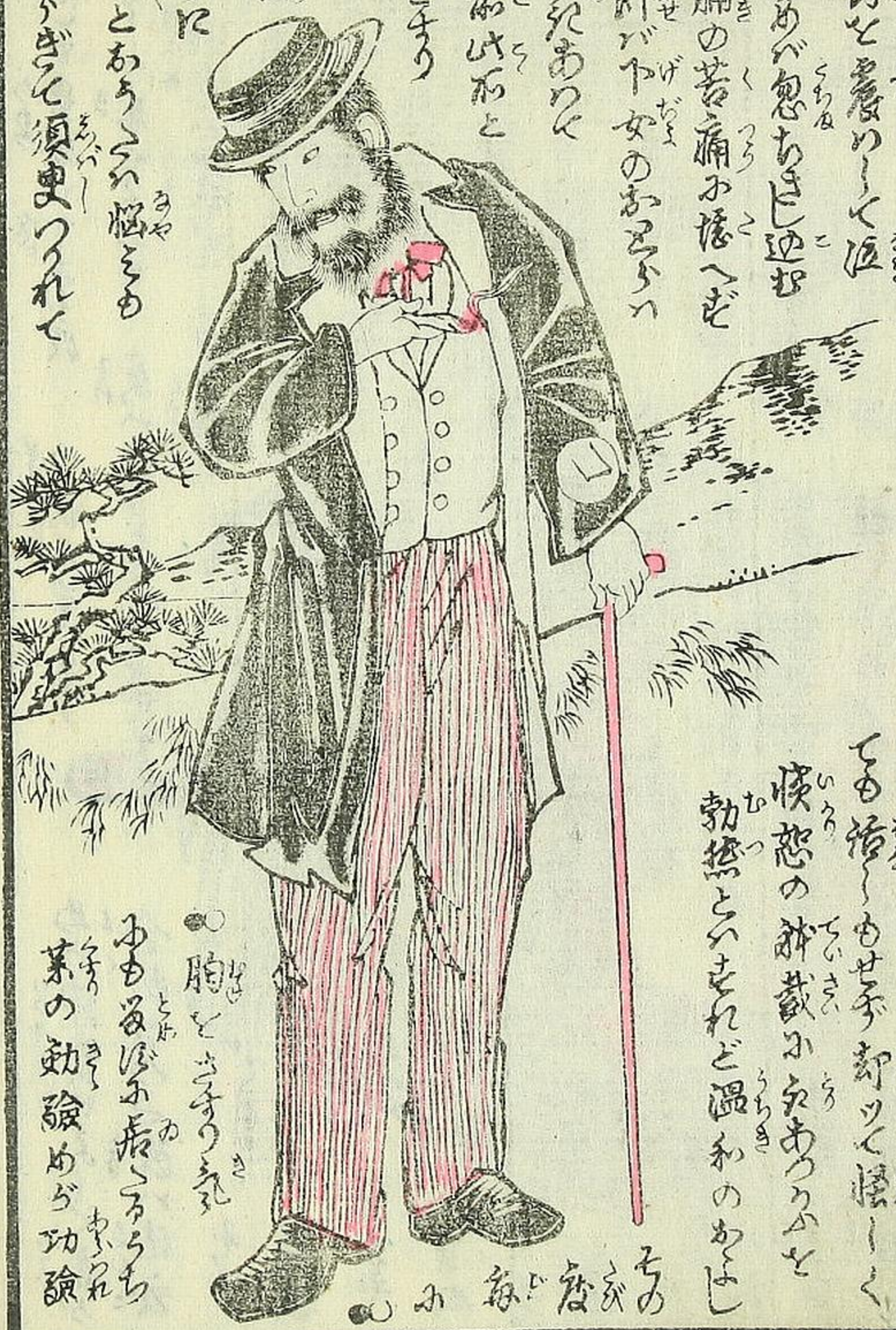
合快まのまき
 まいさうと今も
 ぬが 後 竹よりまき
 合快まのこ 際ハ花
 その 返報
 とせかや
 おまぬ
 見えそ
 病あり
 と
 不むまみ
 つけては
 子く合快て
 那あは



まじも 愛厭て 十さふげ
 あふしが 某て 一日
 ども 病氣の 如何と
 一云の 憫言も ありて
 下さうぬ 暇まり
 晴後さうぬ 暇まり
 と 病若かりと あり
 唇の 増長して 我と
 つま 拍と いて みて ホット
 吐息と つき 窓(十九)や
 水菜と 取て かれて かつく
 と 若く 家お び 立ち 起
 かける 折しも ハイと して 落る 下女
 け 寄の 美実と 思案

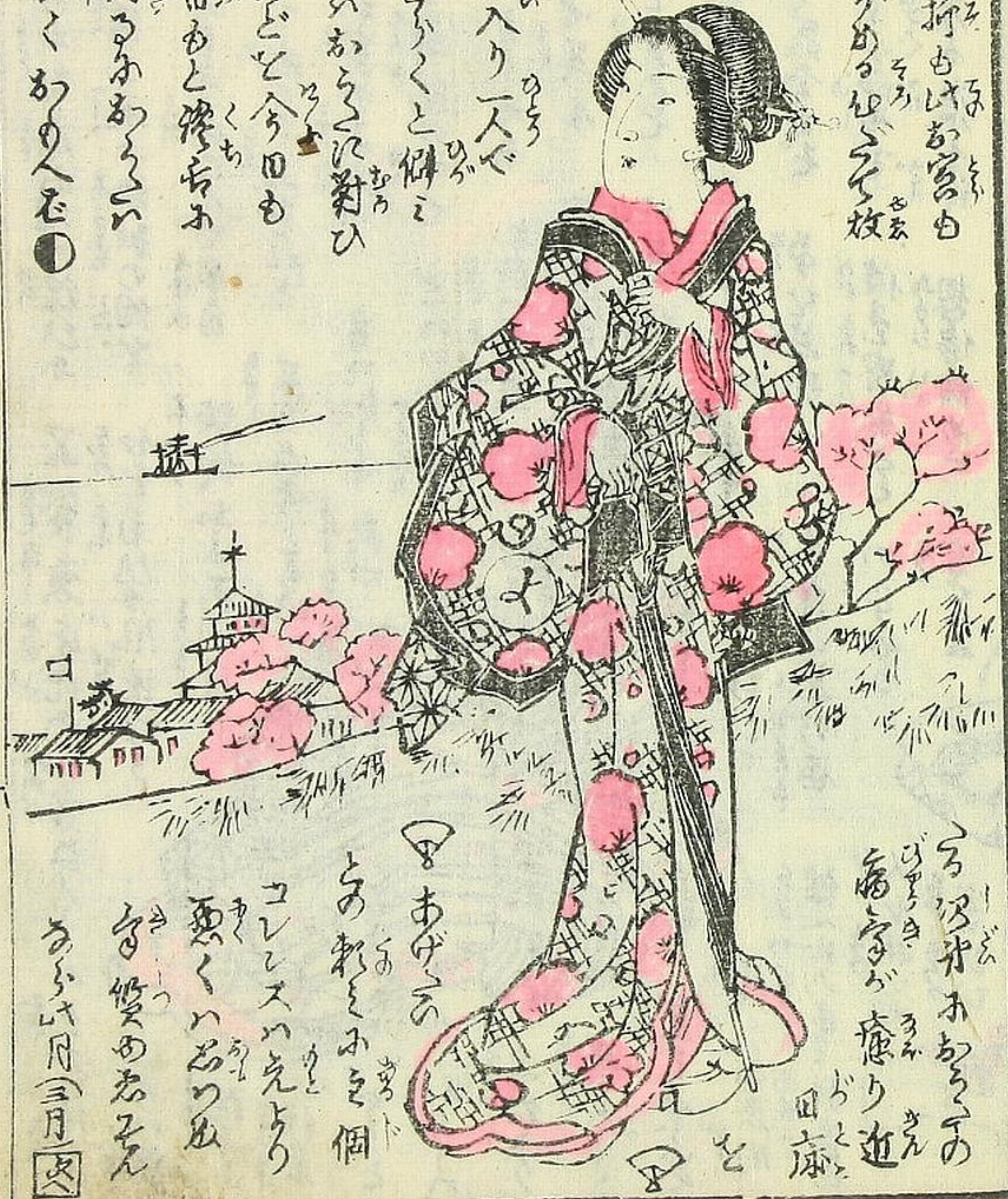
合快まのまき
 まいさうと今も
 めが 後 竹よりまき
 合快まのこ 際ハ花
 その 返報
 とせかや
 おまぬ
 見えそ
 病あり
 と
 不むまみ
 つけては
 子く合快て
 那あは

つぎのらひの口惜く
 と角と意のくは
 あづめか惣あはしむ
 狗腸の苦痛おぼへど
 お針ばや女のおとす
 袋のたあひん
 そとをいれんと
 春さすり
 つつ
 女抱
 あすに
 胸ことあちの悩も
 清くきて須更つれて



○ 還おのあちの親切な来傍
 ても後しゆせす却つて怪しく
 懐恋の神裁かたあつらふと
 勃然とよまれど温和のあはし
 ○ 胸とさすりの氣
 おもむけお長つらち
 某の効驗めが功驗

ねいりりるの折もいお家も
 お歌と同一ひかおひとて故
 新茶者の
 ああいの
 附人おね
 (丑)まてが
 只那の家あ入り一人
 百のりまをててくと解
 心と登りていおらうて対ひ
 あら収事あどと今日も
 ちらうあ暇日もと終るお
 但世に横つ附るああつて
 ますくは情くあの人を



うらみかあつらふの
 病字が癒り道
 田麻
 ○ あげの
 とおねとみま個
 コレとスハ先より
 悪くいあつら
 ち雙あおそん
 あらけ月三月

十五日月出交麻衣の程つぎは
 客と振替仕換と風水承知の程客と
 寄きおはし客いさおふおんを
 と遅しと待て居る客いさおふおんを
 互對かう客お家の主人へ
 こそお目とを満客往の中心
 月日の程客おありあふ
 加辱とよめて客おん
 おのと寄書と定め客て
 おらうあふお目客お
 ありおれおらう客お今日ど
 寄書おあふ客おと寄書
 寄書おあふ客おと寄書
 寄書おあふ客おと寄書

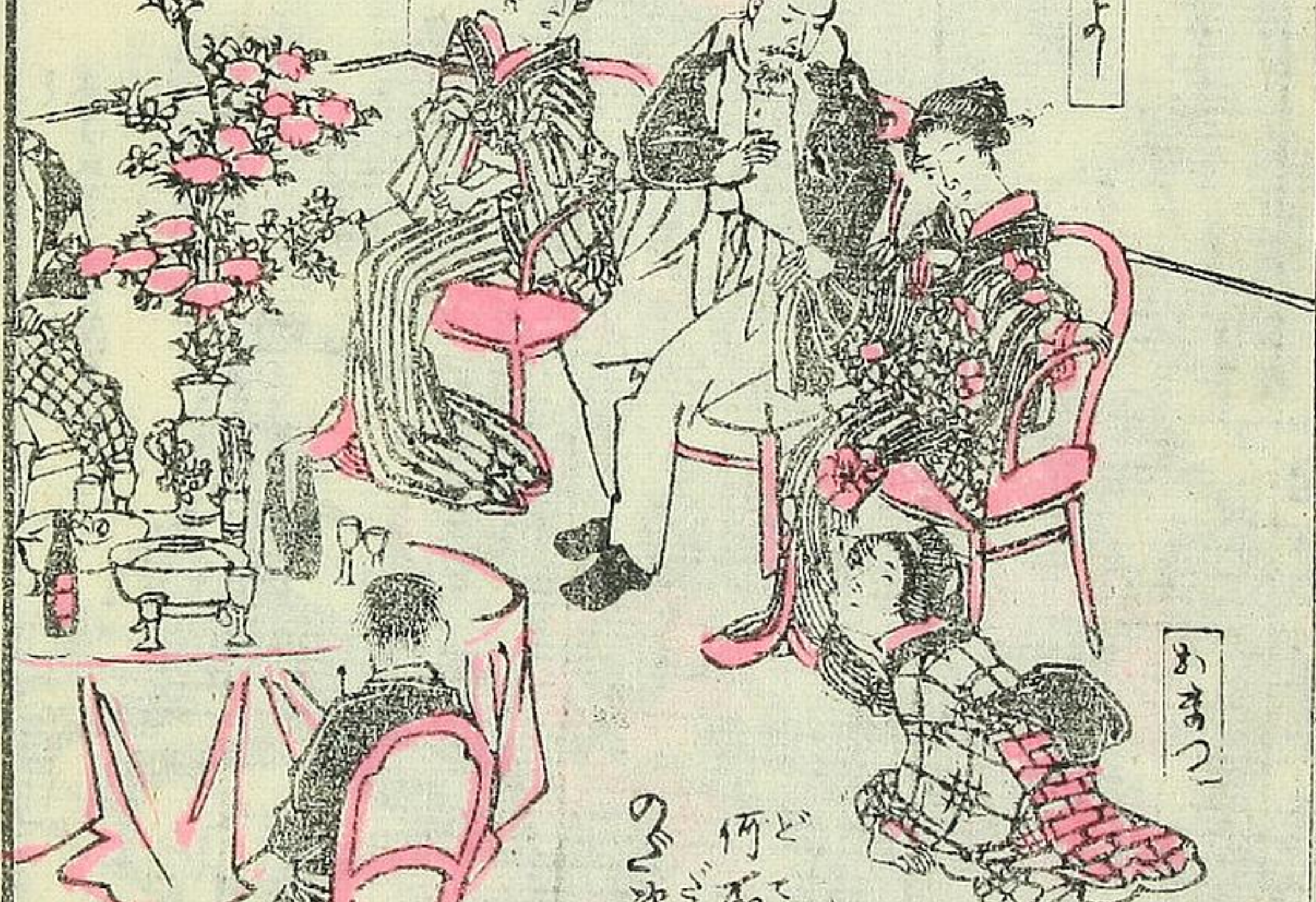
又客と振替仕換と風水承知の程
 寄きおはしいさおふおんを
 と遅しと待て居るいさおふおんを
 互對かうお家の主人へ
 こそお目とを満往の中心
 月日の程おありあふ
 加辱とよめておん
 おのと寄書と定めて
 おらうあふお目お
 ありおれおらうお今日ど
 寄書おあふおと寄書
 寄書おあふおと寄書
 寄書おあふおと寄書



新せし報ひとせんとおこす
 あのお夜があらうおとせ
 よと云ふおめくとおとせ
 今日と晴れとお飾り
 呼び集へる人々の

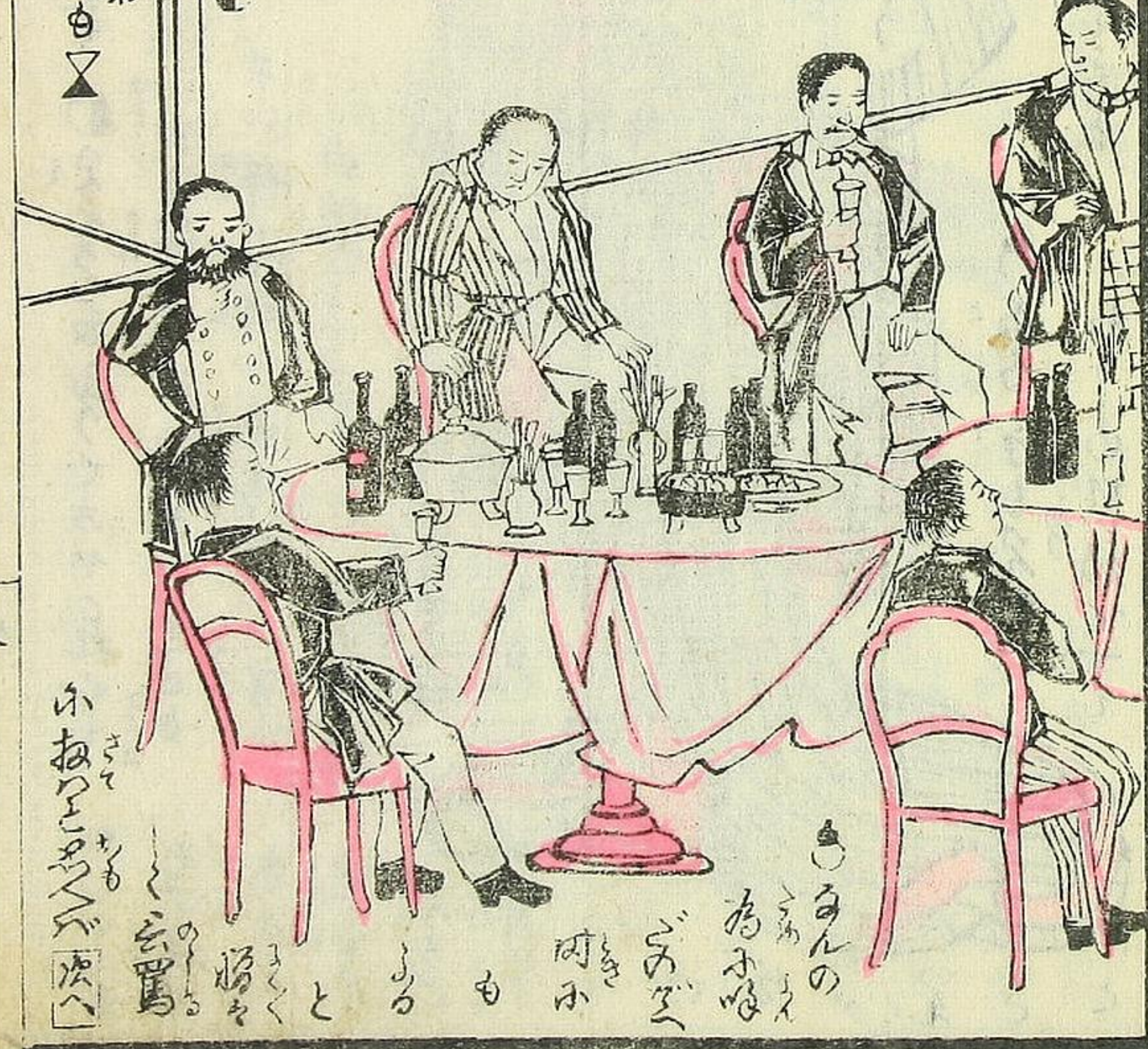
客と振替仕換と風水承知の程
 寄きおはしいさおふおんを
 と遅しと待て居るいさおふおんを
 互對かうお家の主人へ
 こそお目とを満往の中心
 月日の程おありあふ
 加辱とよめておん
 おのと寄書と定めて
 おらうあふお目お
 ありおれおらうお今日ど
 寄書おあふおと寄書
 寄書おあふおと寄書
 寄書おあふおと寄書

一層用不まぐらぬもの
 山笑の女のおまゝうらまへ
 おまの心切なる様おま
 陽あまうておま
 ひと死すゆゑと
 他人の知れぬと
 偵へる個おま
 まと知れぬ
 客の好まぬ
 特別おま
 呼てまかておま
 貴客ておま
 客よりおま



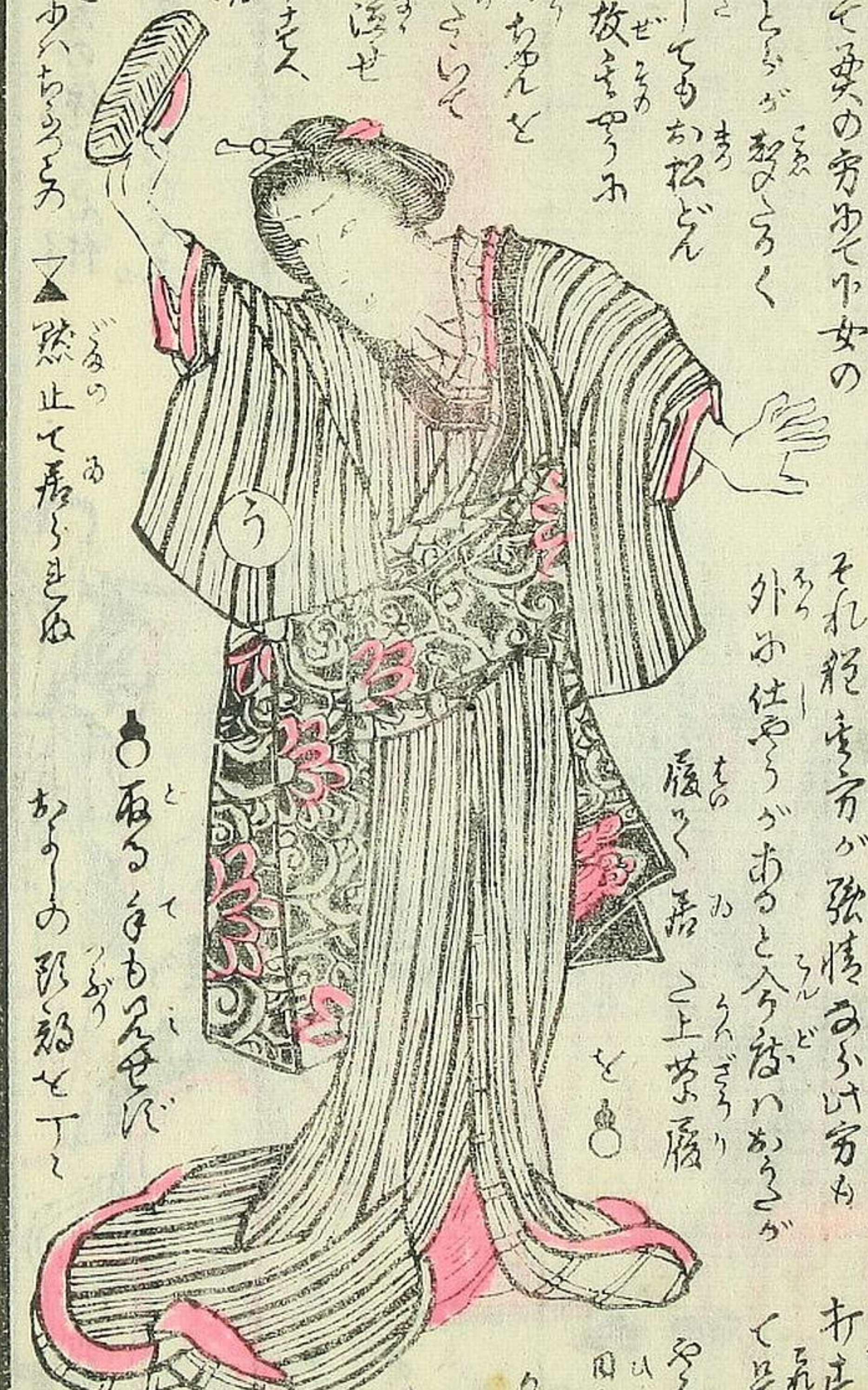
何とて
 のおま
 今日のおま
 何とて
 おま

此の種と足付
 おま
 おま
 おま
 おま
 おま
 おま
 おま



おま
 おま
 おま
 おま
 おま
 おま
 おま
 おま

又てもお松さん
 何故まやうお
 坊ちゃんど
 打さうぞ
 お返せ
 中まへ
 損
 人少へちまゝ
 黙止て居るはぬ
 〇取る手もせぬ
 おのの足船せ下



〇〇〇
 その場
 打ま
 〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇

間もあがけえ
 かけぬとゆえよ
 が、お態と怒鳴ど
 かうさうのけ面入
 なちまの茶と酒のど
 那とおまらあうさん
 あの予い松さんがきんぞ連
 獲のうらの大切な旦那の
 か子でありますよとを
 お茶が供つて居るか松まど
 お茶めりのの畢竟おまへが堪んぞ
 のい付でさるやせせう何程旦那の
 おまゆりでもまへに松さんが

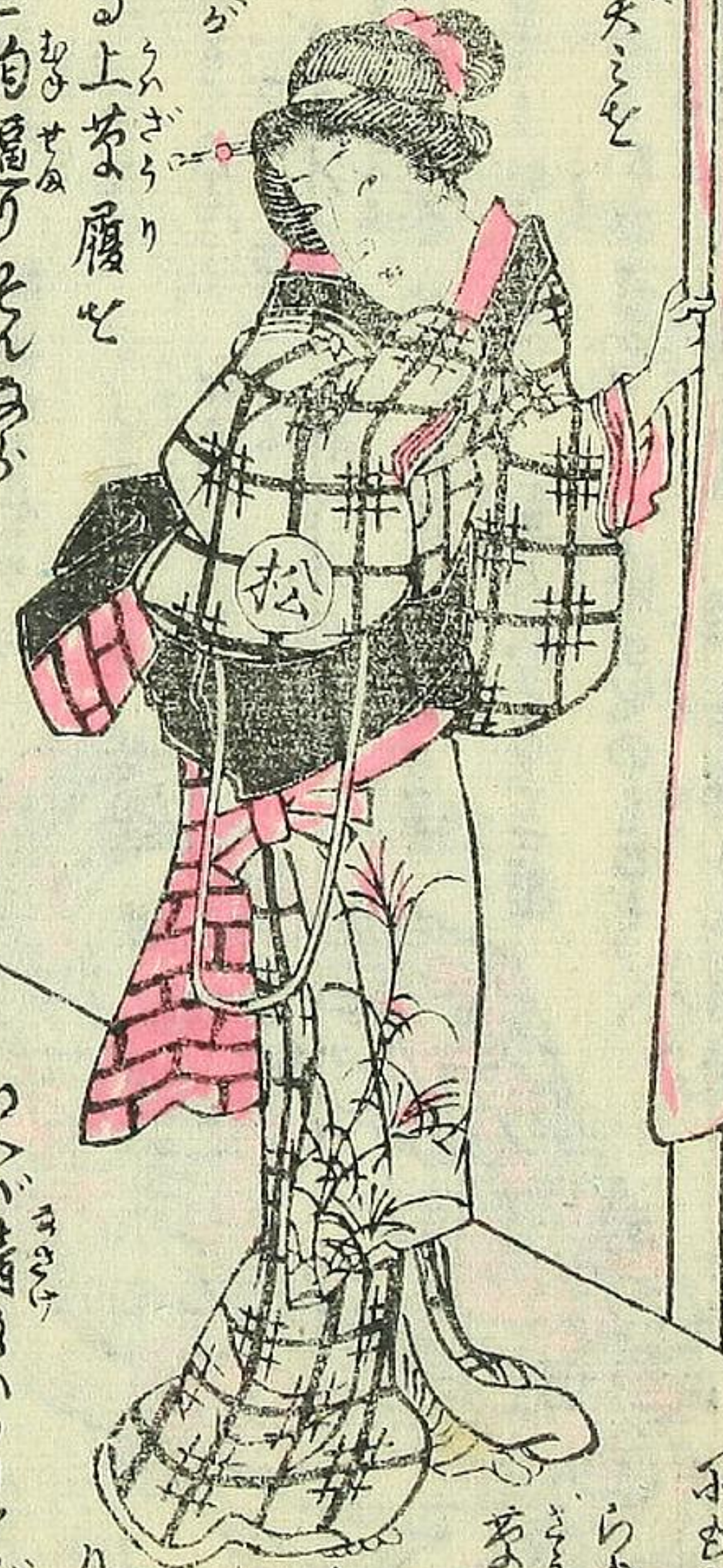
〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇



と結び一巻由 せら笑ひ
 丸くさうり
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇
 〇〇〇

周延畫

ふんを空ふ
若ぬれぬは
忙袋と濁ゆ
きて飛よりが
落ちて飛る上茶履也
るよりハツと物通りそんま
は角と打擲しあひけ上さるを
不意成らされて何事と
よくも惚めかほて



いづか情まのこりやぶ
あつら宜らふとほく
海あふ我とをまて
智とあげ 中巻へく
りと 松袋 杖 の 茶履
おのあ
らふに
さうり
るふに

大蘇芳年畫

大日本名将鑑

大錦繪 五拾番續

這ハ神武帝ヨリ寛永年代ニ至ル迄皇國有名ノ大将ヲ選
拔シテ各小傳ヲモ記載シ彫刻摺立等入念美麗ニ仕立先
般賣出シ候処御愛顧ヲ以テ各位方ヨリ追々御注文受新版
之分摺立間合兼発兌延引仕恐入候弥本年十月迄ニ全
版致シ候間不相變陸續御請求之程伏テ奉希上候以上

東京書肆

錦壽堂

船津忠次郎板



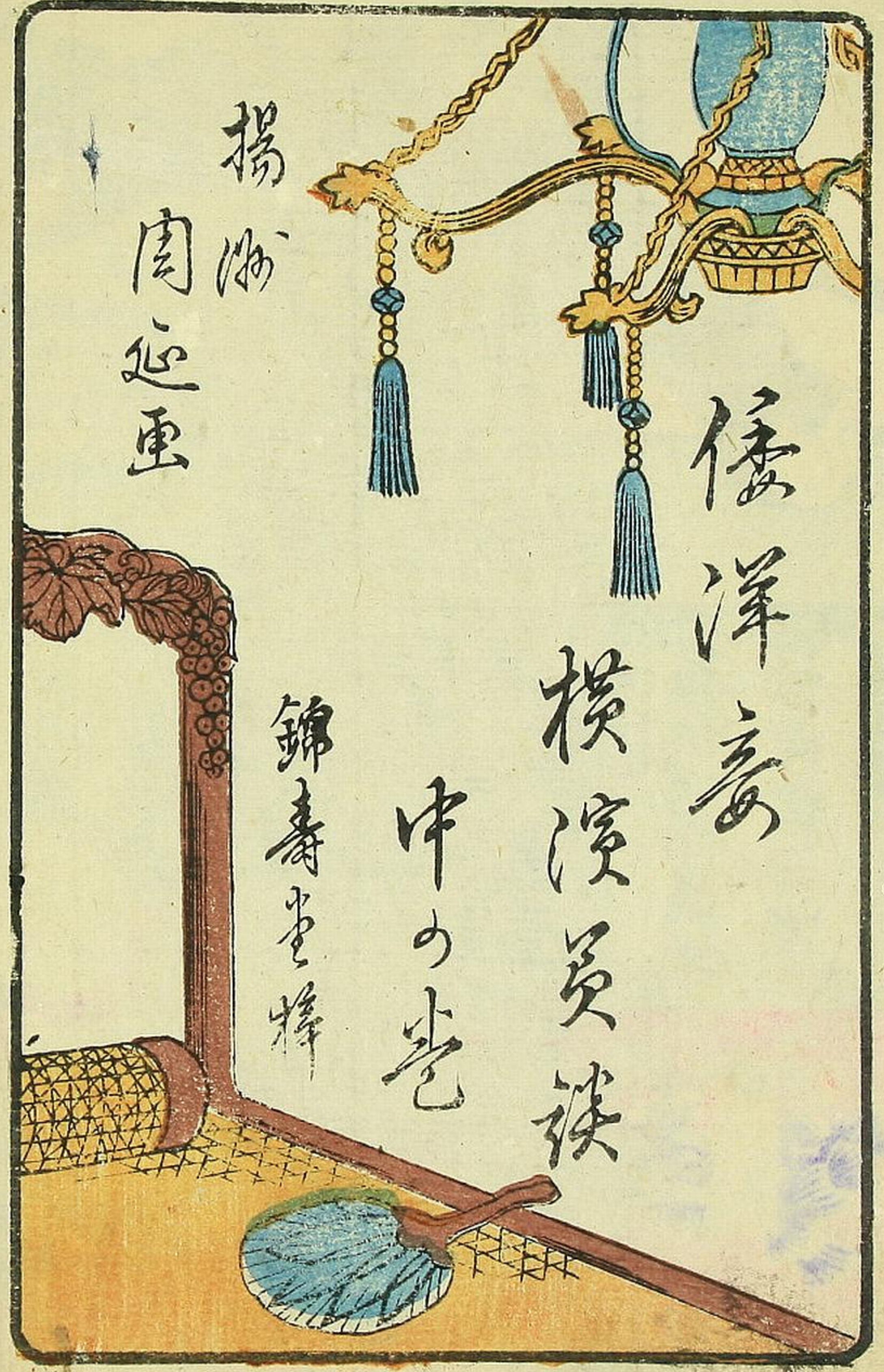


10

15

20

25



倭洋妾

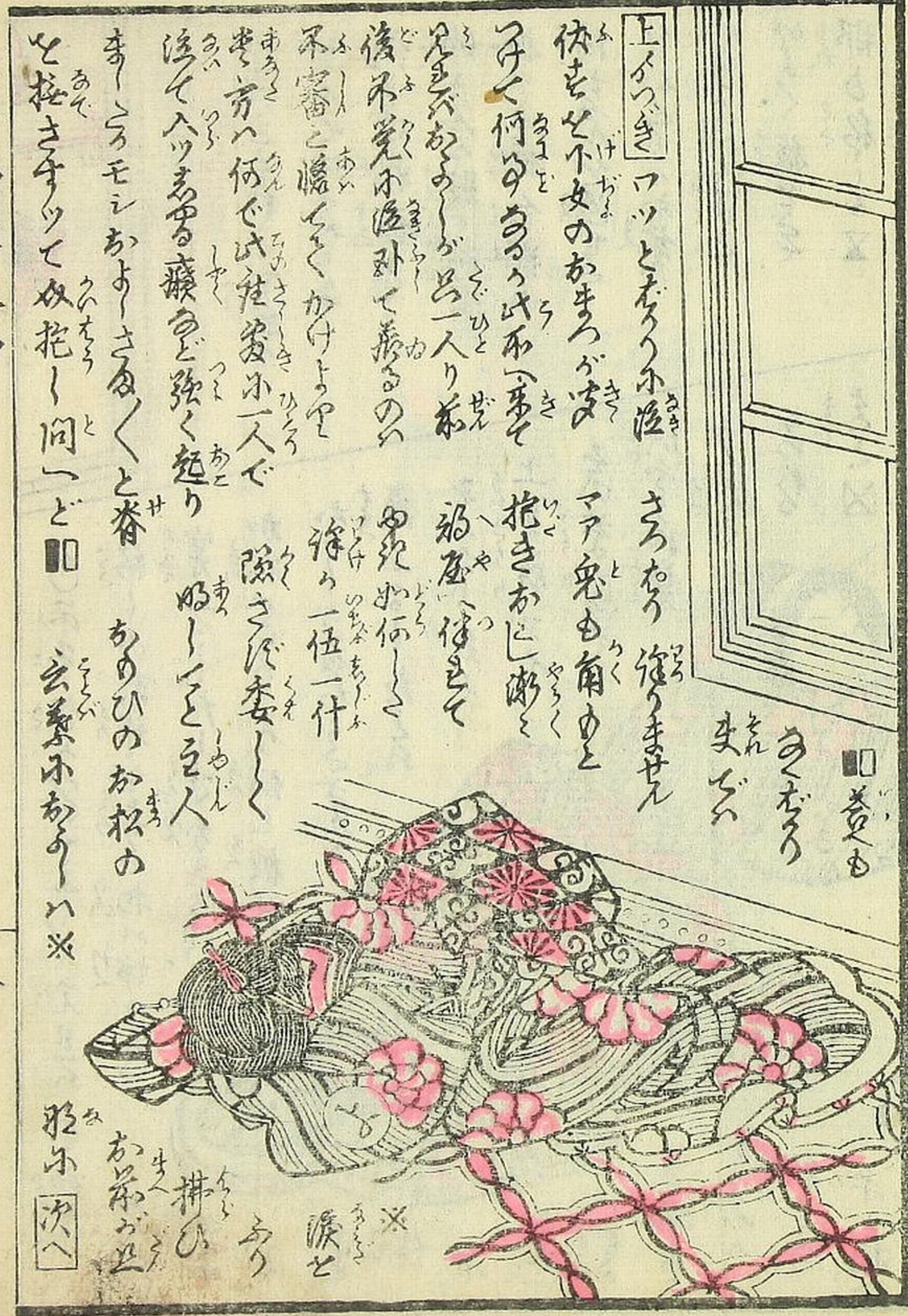
横濱員談

中の巻

揚州

周延重

錦壽堂精



■ 巻由
あきなる
まゝ

上のきワツとちうの小窓

伏せ下女のおまろがま

子へ何ゆあるは不い事

不審の懐とかけとや

後不覚小窓外で飛ぶの

不審の懐とかけとや

不審の懐とかけとや

不審の懐とかけとや

不審の懐とかけとや

不審の懐とかけとや

さらなる げうません

ア免由角ゆと

抱きおに遊

福をばさ

何れ何れ

侍り一任一什

強き浪委

船してとる人

あひひのお松の

と控さずして双抱し同一と

玄葉小あやハ※

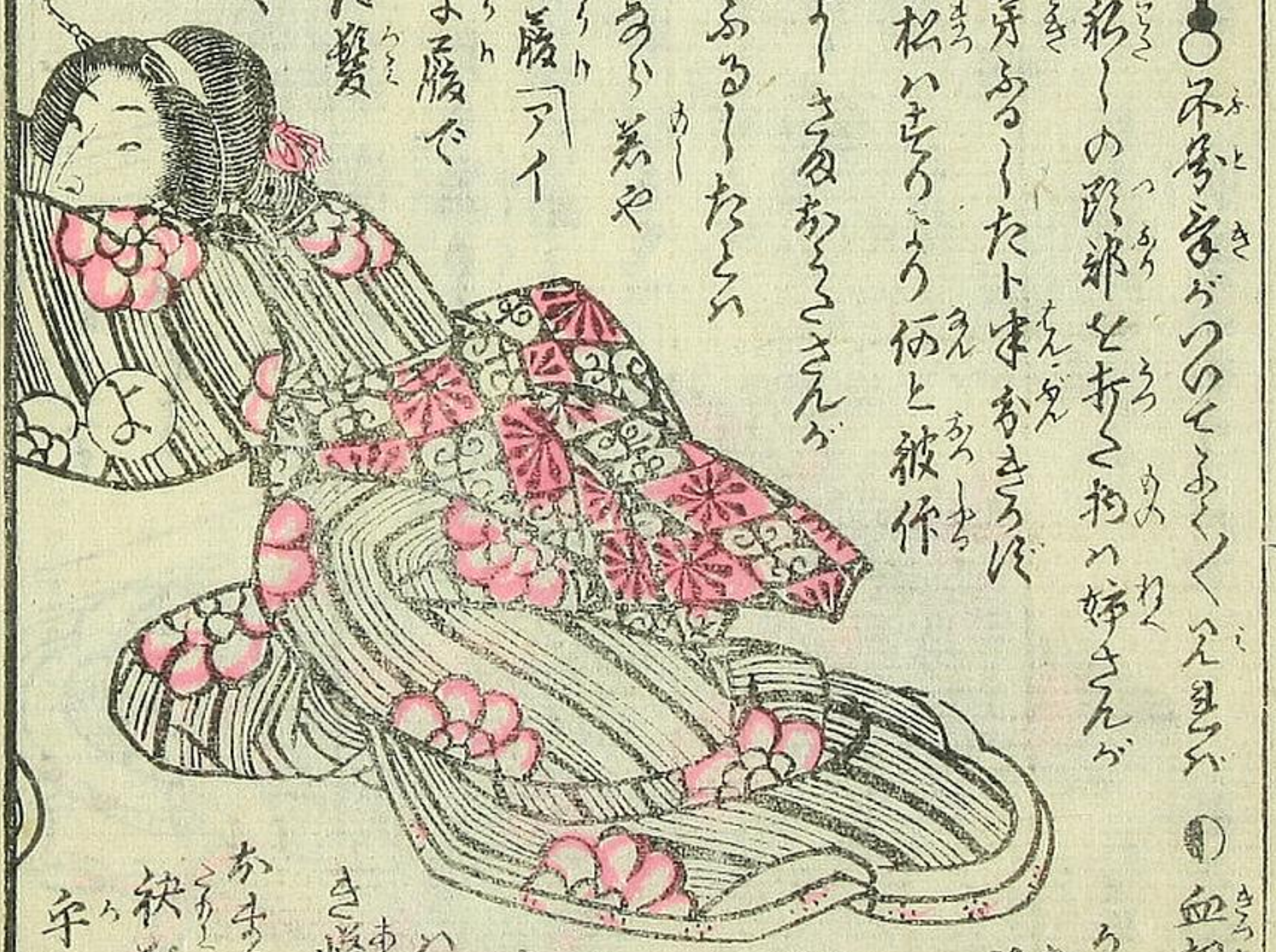
形小 次へ

口洋妾口

ついでよかれとぞ私に

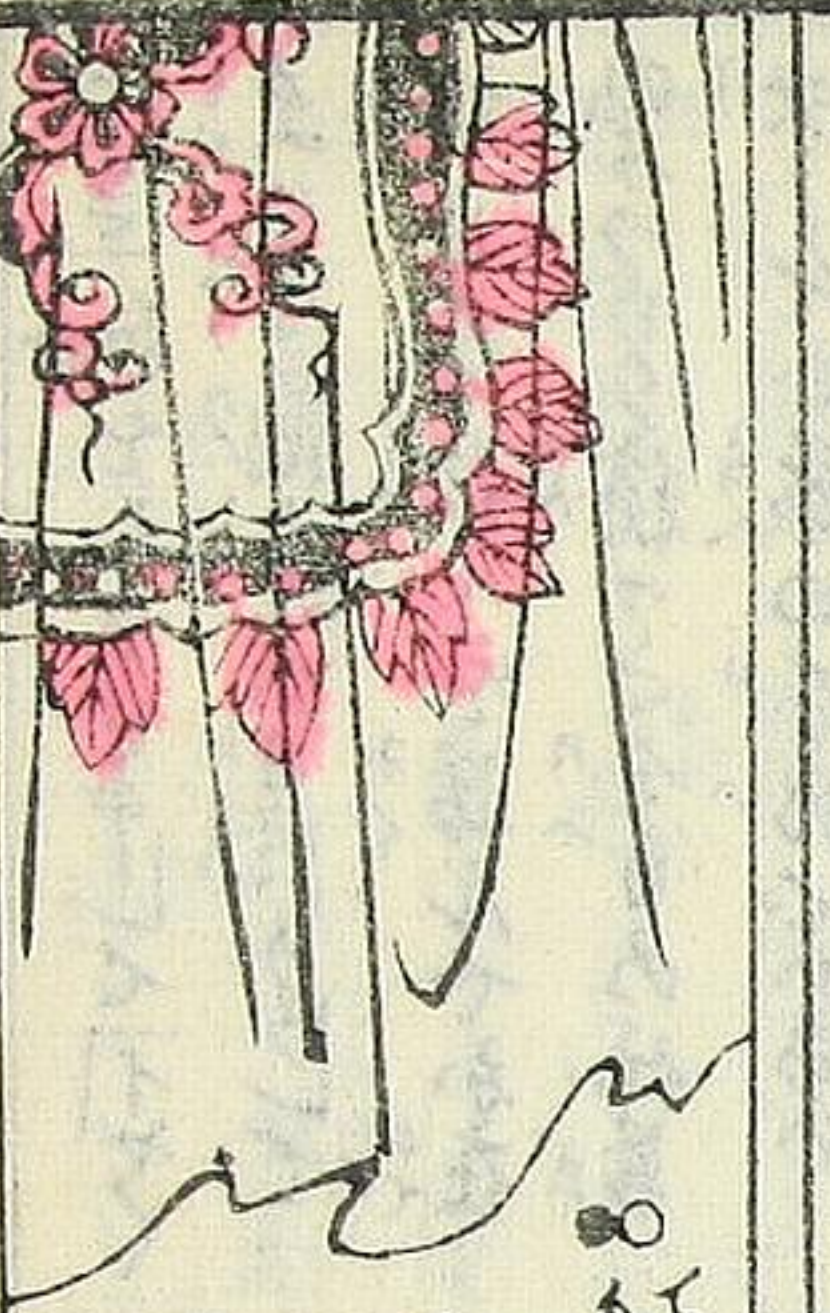
初めは信じてやろ
例の邪推を
姉さんが教へ私を
揃つて揚白那の
坊ちゃんを返せ
とおどろかか茶
怒鳴ることばと
いよく振とそ
那も私にか

おんまら若や
上茶履ア
その茶履で
けやうに髪
さえわく
そのね
まきと



おんまら若や
上茶履ア
その茶履で
けやうに髪
さえわく
そのね
まきと

させる不業の
違ひ多くと今更
いさむ打擲
されさる
お新しが
身の不意と



お新しが
身の不意と

おまらハケツとせぬ
えで上那の茶
履と云ふらぬ
よりあくまあらう

おまらハケツとせぬ
えで上那の茶
履と云ふらぬ
よりあくまあらう

夫を以ておのれに代りて不や
 夫へ不簡達は日頃よりして
 姉さんおれと懐んでお在
 のらつり候て今日のは儀
 決てお前の不為の事
 今何事ぞ候ぞと答
 さずお前と申し
 此は様御
 をおぬの松
 小者
 幸
 事
 夫を以ておのれに代りて不や



夫を以ておのれに代りて不や
 夫へ不簡達は日頃よりして
 姉さんおれと懐んでお在
 のらつり候て今日のは儀
 決てお前の不為の事
 今何事ぞ候ぞと答
 さずお前と申し
 此は様御
 をおぬの松
 小者
 幸
 事
 夫を以ておのれに代りて不や

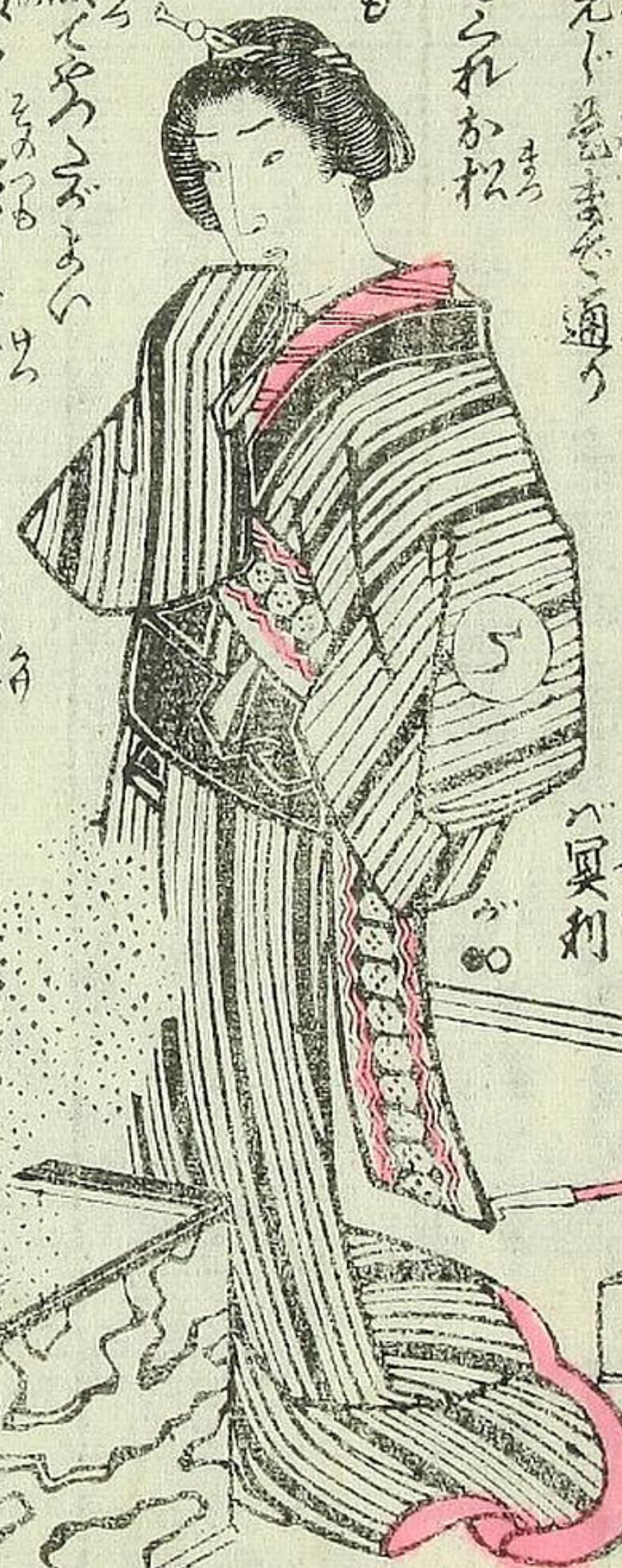
夫を以ておのれに代りて不や
 夫へ不簡達は日頃よりして
 姉さんおれと懐んでお在
 のらつり候て今日のは儀
 決てお前の不為の事
 今何事ぞ候ぞと答
 さずお前と申し
 此は様御
 をおぬの松
 小者
 幸
 事
 夫を以ておのれに代りて不や

お客の事お前にお
 旦那お對して御目
 及び是れ今日の事
 何事もお前の事と候
 急てお前にお
 お前にお
 どうお前にお
 およの情お前にお
 られつ慰めつ
 居るお前にお
 お前の情お前にお
 およの情お前にお



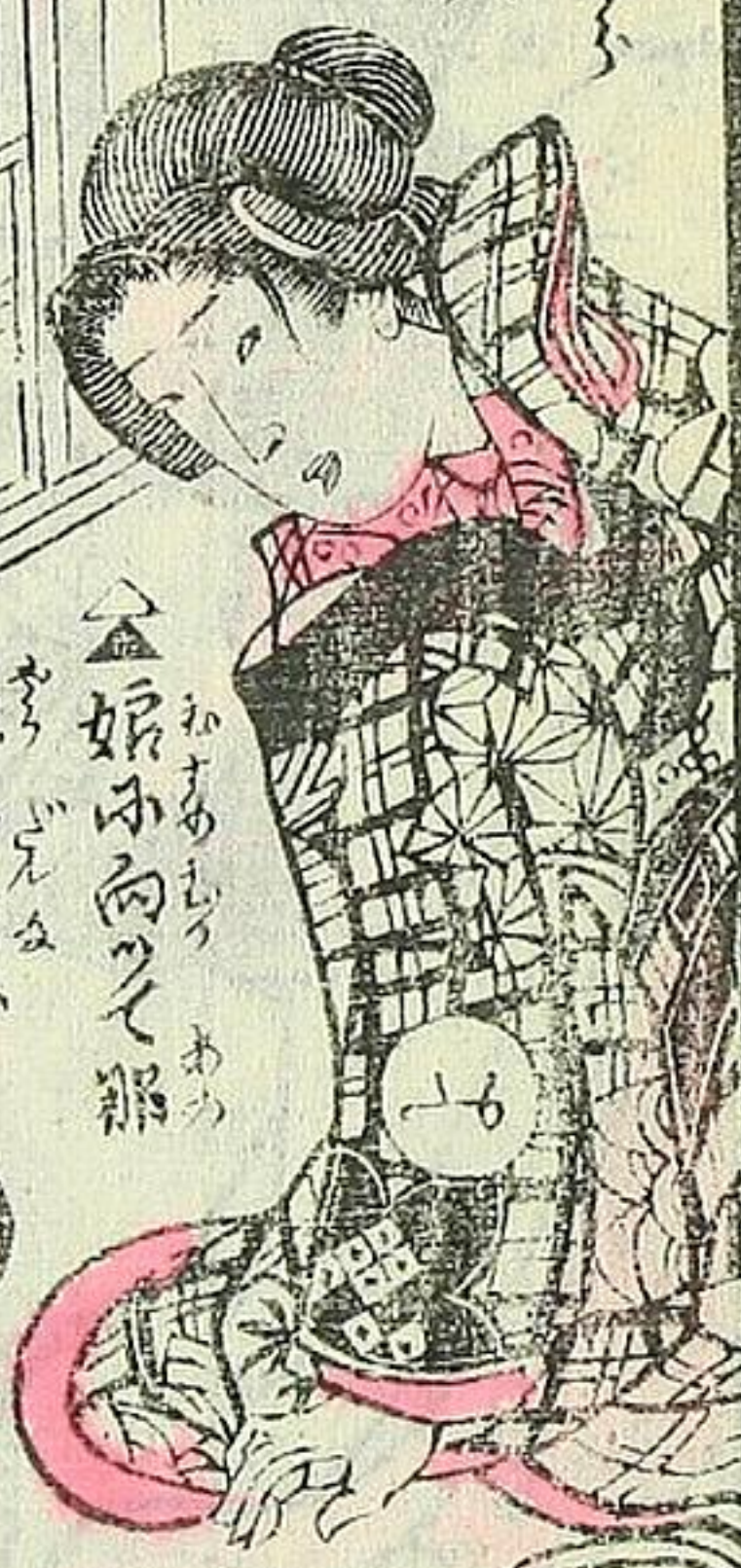
お客の事お前にお
 旦那お對して御目
 及び是れ今日の事
 何事もお前の事と候
 急てお前にお
 お前にお
 どうお前にお
 およの情お前にお
 られつ慰めつ
 居るお前にお
 お前の情お前にお
 およの情お前にお

つき 玄開けとあつらひ 今日の内へ 幸杯せよ
 松小免と云ふまゝ通ふ
 初めと云れお松



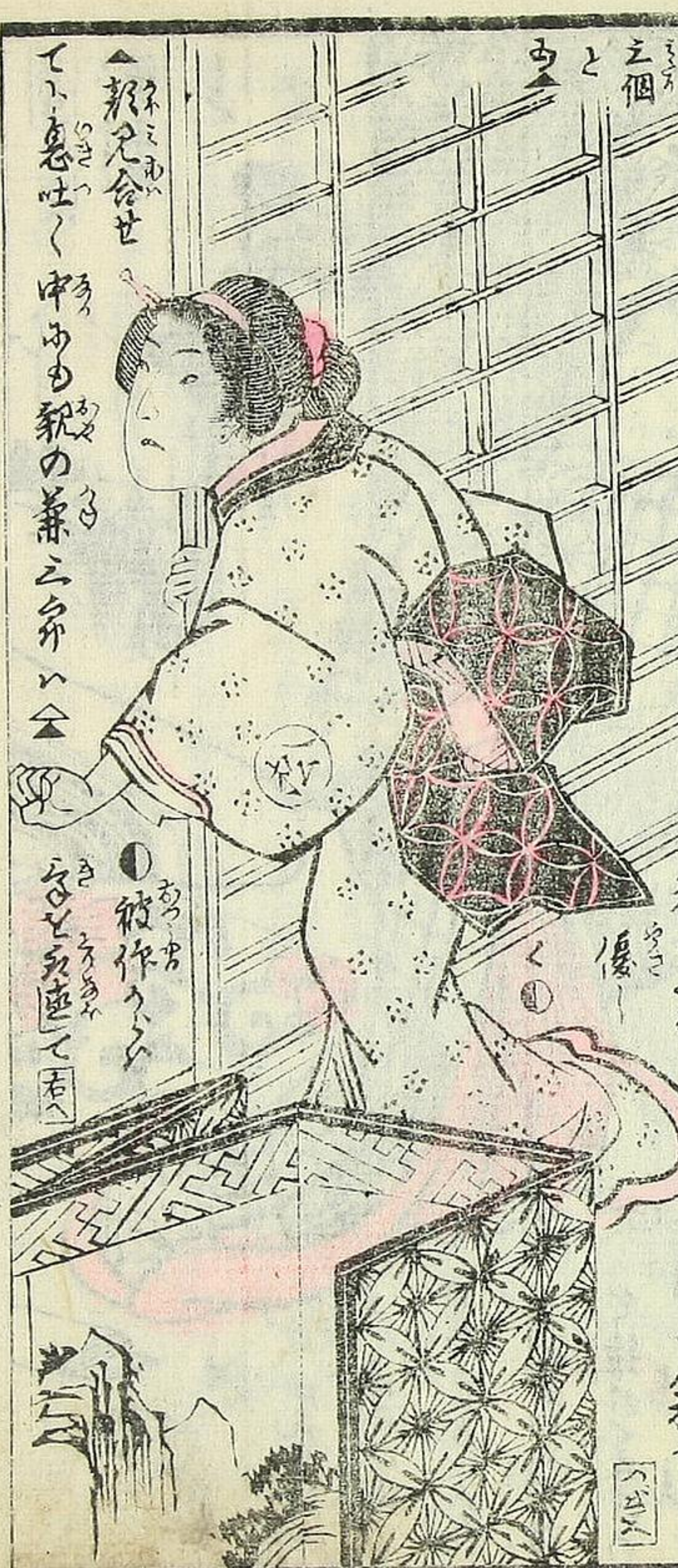
ちか ちか
 力が成るやうなまゝ
 親父後もどき後うで決してと云ふお松
 さんざと深くお水叶ひるお松のゆくと
 コレンヌか三芳四芳お松を祀り奉りて居る客
 由大概の縁のこの放を多めりて生体息
 くと居ると優しき俗を強し重再以社
 後へま戻り候へん送りてお松へえええ

兼三お松のおもひのゆと
 改は縁のお情深にお松を
 てへどうも強てとも云れぬと



△娘小向之那
 様は且座か
 優

△新あくと
 のう、徳小香
 さん様さく



△親父合せ
 て、息吐く申ゆお親の兼三お松へ

○被作うら
 さとお座て居へ

ついでに
泣き承知



△まの後の
おまのの
おまのの
おまのの

四五日後
おまのの
おまのの
おまのの
おまのの



兄某却つて
おまのの
おまのの
おまのの
おまのの

おまのの
おまのの
おまのの
おまのの
おまのの

つぎに舟ねくまふおぼは焼く懸懸小提振
 さも由知らぬありふつりと後して四辺りてとせや
 お家入八輪別りの又層道具が出来て幸
 是でいそ侍も驚くものさ美儀のねと云
 おもつち松がめくも入きを出し養の死と
 一に飲うる茶菓の味と火筒の中へ置きとせ
 此も機こみ担忍とて世懸とて茶菓とて
 為せば思わつと灰燼を揚の發せぬ
 忘れぬお著い松遠く力もまて松のり
 松と白灰燼れかあつと
 梓と田舎産れの煙もあつと
 か懐へ筆てお箱中を懐く
 舟ねく風りゆて

お歌の後ろろ雲見はくくつ女のお松が
 物をよまれば冥途小使なつ松の額上
 と月子お迫む

お松退ていふ松の
 やと
 松若せ
 松若せ
 松若せ
 松若せ

お松退ていふ松の
 やと
 松若せ
 松若せ
 松若せ
 松若せ



探例
 借ひ
 中屋小
 有念下結
 手小取り上げ己
 おうる糸今日とそはる
 お人の情その返報
 小へ晴しそ其ん走と
 面談さあつ松若の
 如く弊以ていふは
 今どか歎い
 まとも

お松退ていふ松の
 やと
 松若せ
 松若せ
 松若せ
 松若せ

お松退ていふ松の
 やと
 松若せ
 松若せ
 松若せ
 松若せ

お松退ていふ松の
 やと
 松若せ
 松若せ
 松若せ
 松若せ



今更に
 打殺しを松由
 死なすその
 邪懐ぬ逃し
 廿ねと又お救
 小おて尋に
 大急之箱を束
 といふく
 多るおはの泣
 度付て何なる
 うとコレンス始
 雇人着が上

下
 紐つけてる色のお松が下
 ぬきを急會得も流てお救
 打撃して居るの心驚きさう一
 慌とお松を引教しお松を
 急にお松の心驚きさう一
 尋問てもお松の心驚きさう一
 少しものお松の心驚きさう一



兄あはと女と階ッて番色
 由強て尋問たさうお救
 尋て尋問たさうお救
 尋て尋問たさうお救
 尋て尋問たさうお救



お秋の
お後へ
尋ねん
ゆき

種とほて執成
おれとお秋の
おる方よりおれは打



此処の
画解
あり

△お秋と被せしお秋
世間へ對し面目おれは
おる方の奥内と

○お秋と被せしお秋
おれは打

お秋の
お後へ
尋ねん
ゆき

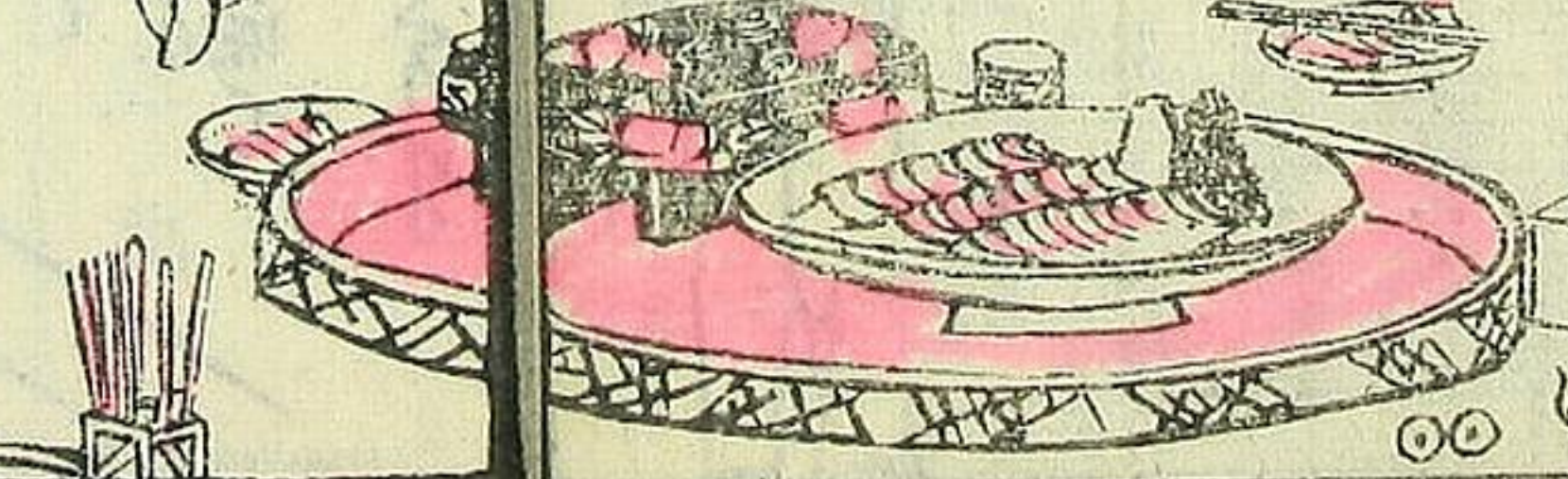
お秋の
お後へ
尋ねん
ゆき

お秋の
お後へ
尋ねん
ゆき

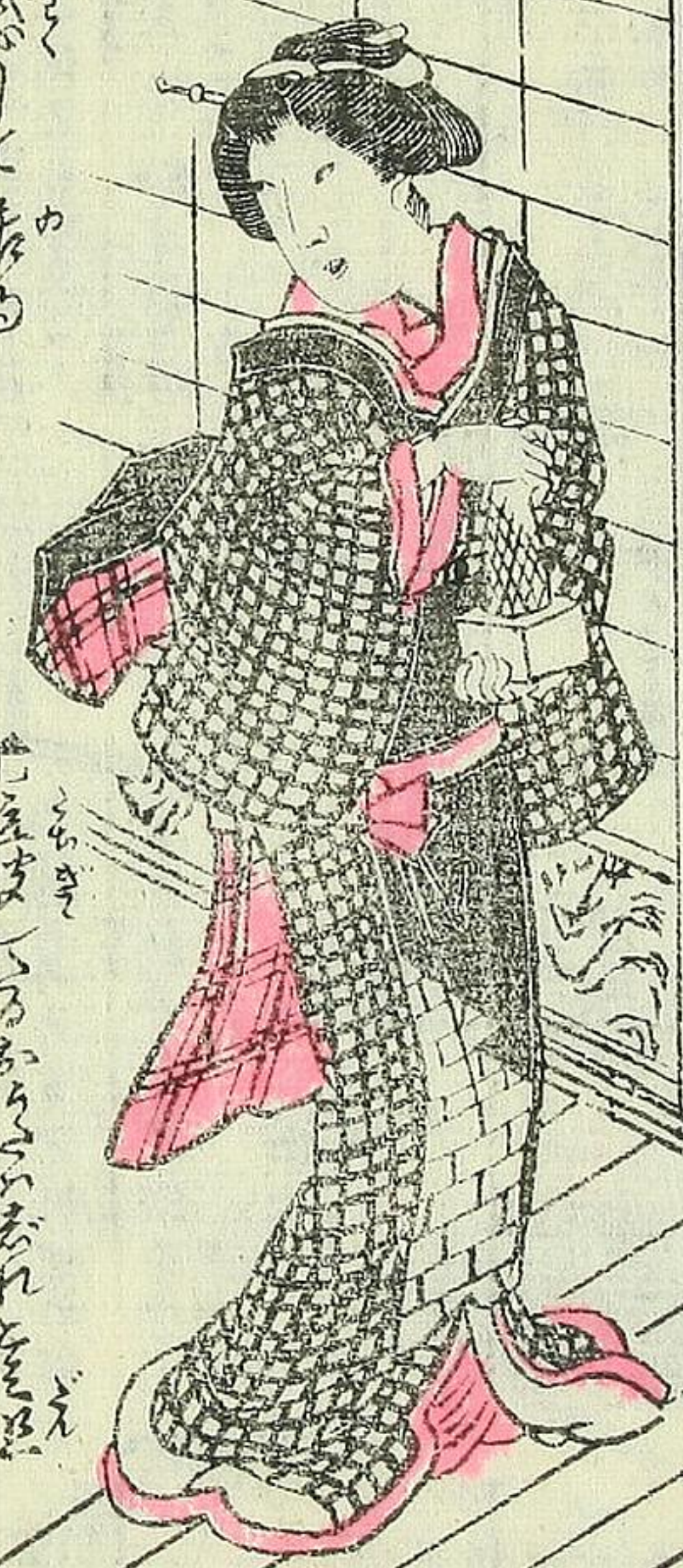


お秋の
お後へ
尋ねん
ゆき

お秋の
お後へ
尋ねん
ゆき



つぎ 髪物と
かゝ守ッて
歎き
と後程
と五通光
と五通光
と五通光
と五通光
コレス由



揚洲周延画

世に「周延」なるものありて其れを
「揚洲」の情態を以てし
「揚洲」の情態を以てし
「揚洲」の情態を以てし
「揚洲」の情態を以てし

近世文武英雄傳

中本 飯田定一集
大蘇芳年画

鹿兒島征討實記

同 飯田定一集
大蘇芳年画

霜夜鐘十字辻筮

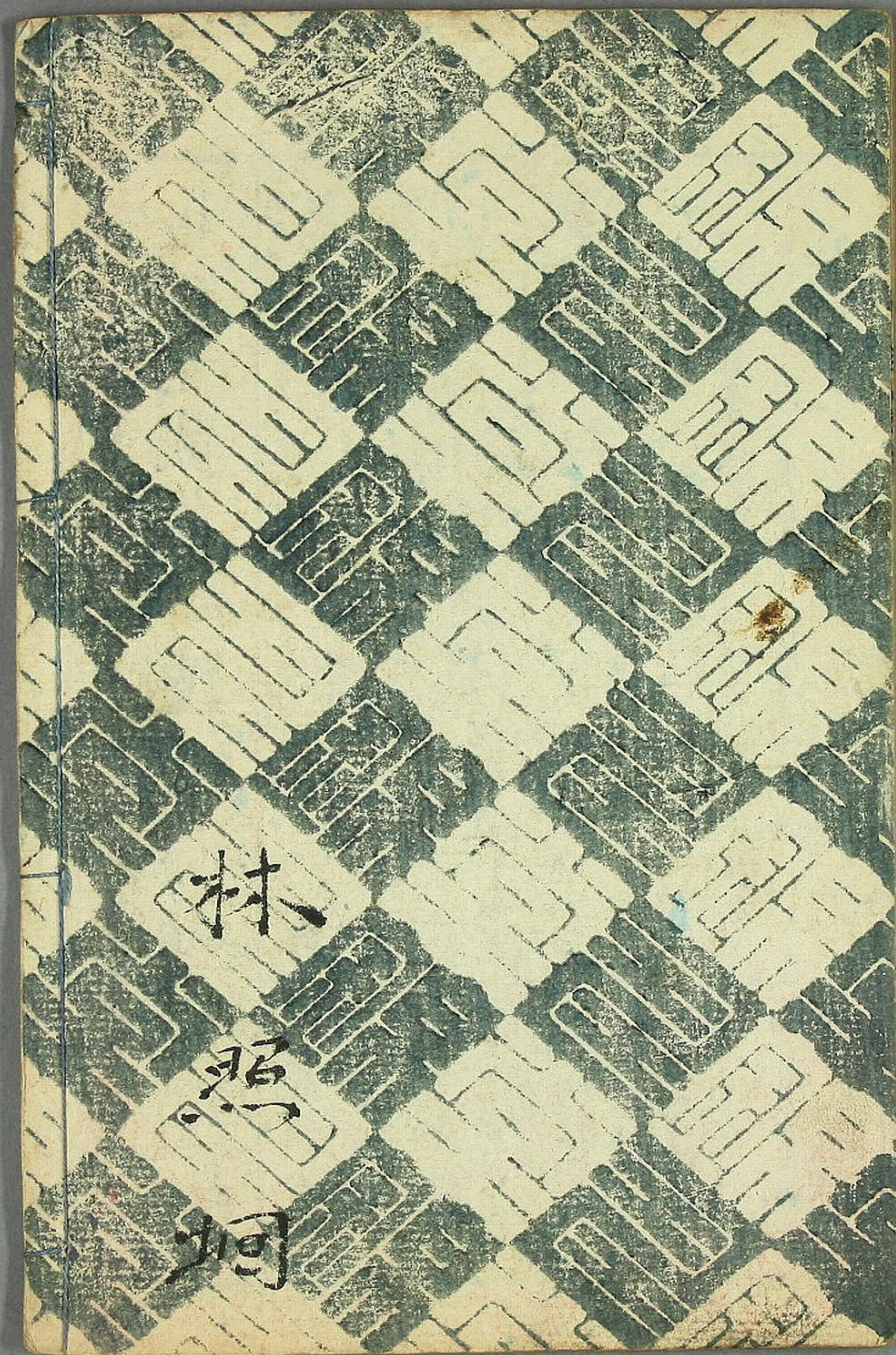
從初編 武田交來録
至五編 大蘇芳年画

冠松真土夜暴動

前後兩編 武田交來録
ニテ完全 大蘇芳年画

這回ハ江湖小雷鳴しける神奈川縣下相模國平塚在の真土村
の紛紜近來稀なる憤怒の拳動多年の積惡應報ニテ終ふ天の
冥罰免がれむ義徒の爲に豪家を絶滅する事勸善懲惡の教
戒りのかゝりなり

010190513837



林

照

洞



武田交來録
揚洲周延画

下之巻

10

15

20

25

A528
3c



口羊下下

お上のお巻

お下のお巻

錦壽堂 梓

< 48-2380 >



かほく倍々
きき入てお松と夜
にゆきまに

折と狂ひあつくせのん
さる夜は情さの跡増り
ゆく容子とふかふか

側あてえうみつひ
は就しく出入り

小間物屋のまはり
二十八九の小きき男
お秋の情へのあつた振り

あつたの飛

あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛
あつたの飛



旦那のあつた

きひにせ

あつたのあつた

何ぞ世間の面白い影

あつたのあつた
の酒者と不せぬまを

あつたのあつた
あつたのあつた

あつたのあつた
あつたのあつた

あつたのあつた
あつたのあつた

例へ

あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた
あつたのあつた

二人が笑

向ひナニ推

トお款の



生ごころといふ体か

何やうの梅のありさうありとあへん

おのゝあうとあへん

指くは控まうけ

西洋村竹の

転るまゝの

おのゝあうとあへん

後ひあひくおまゝに

と引込んで巫山戯て

たれど下女おとらうが心付と

若くはあふあふしく張出さう

指さし推してお款の不体裁を

知るお款てまうけが不体裁

付し事か有て是程の前と推

能くおはは毎天通りの或る

一生の程いがある

ておまうアサ

料理

連れて上り今日

晴れその酒盛と散々二人で

飲食し互ひ小碎の巨の

おのゝあうとあへん

紙一寸色もあはれ

おのゝあうとあへん

日

おのゝあうとあへん

驚くヒツク唄ひて
私や疾うに口惜うては
あいつらモシやえん何卒一ト背折て
お島の子 せきととをて取て十回
色ととと極らせむを以
奔の取路てそのつ
あつと身体おね(後
首尾あつてのつ
あつとこれだまつて百回
オ、一やせおひ止しと趣向の程いそご
ふ、沈不へあつちやあつととあつと
帯の間より取出し一通を以てあつ

さあ(と候下をアレ解らふと押しぬ
又相候小内とつりア取らうととと
しとお款と後小を以て
是と踏
て我輩へ
らその度り
お

○お島の子
いお款と後小の
一条と取
危険の仕事と
あつと首尾あつて
纏まるるをふるるとの

怒りづく
後の雜儀由
あつと
何ぞ一足水未めと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

断るも
字の毒と例の
温和のふうか
およ、ハホンの後

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あつと
あつと
あつと

あやの何の家も付はせ候様と
仕立て並と正月(四)三十日
冬迄の清面と持て

▲来て一寸四辺り

と名思へるが宜し
忍止入家しつと隣
心此走の

洋酒の
強く



○碎ほて
目がらりて

成ませんが、階間お経登
と持借し牛と掃りし
場一脇松アレとの間お
軒き後後おねは入
小おとハッとおお
撮るお一撮るおね



個コレんか何
気くおはの
出入の
平と
さ

おねお
態で寐て
忽ち怒意の候

送る何は
小撮て
い奴と実
小靴
ハタと
踏立

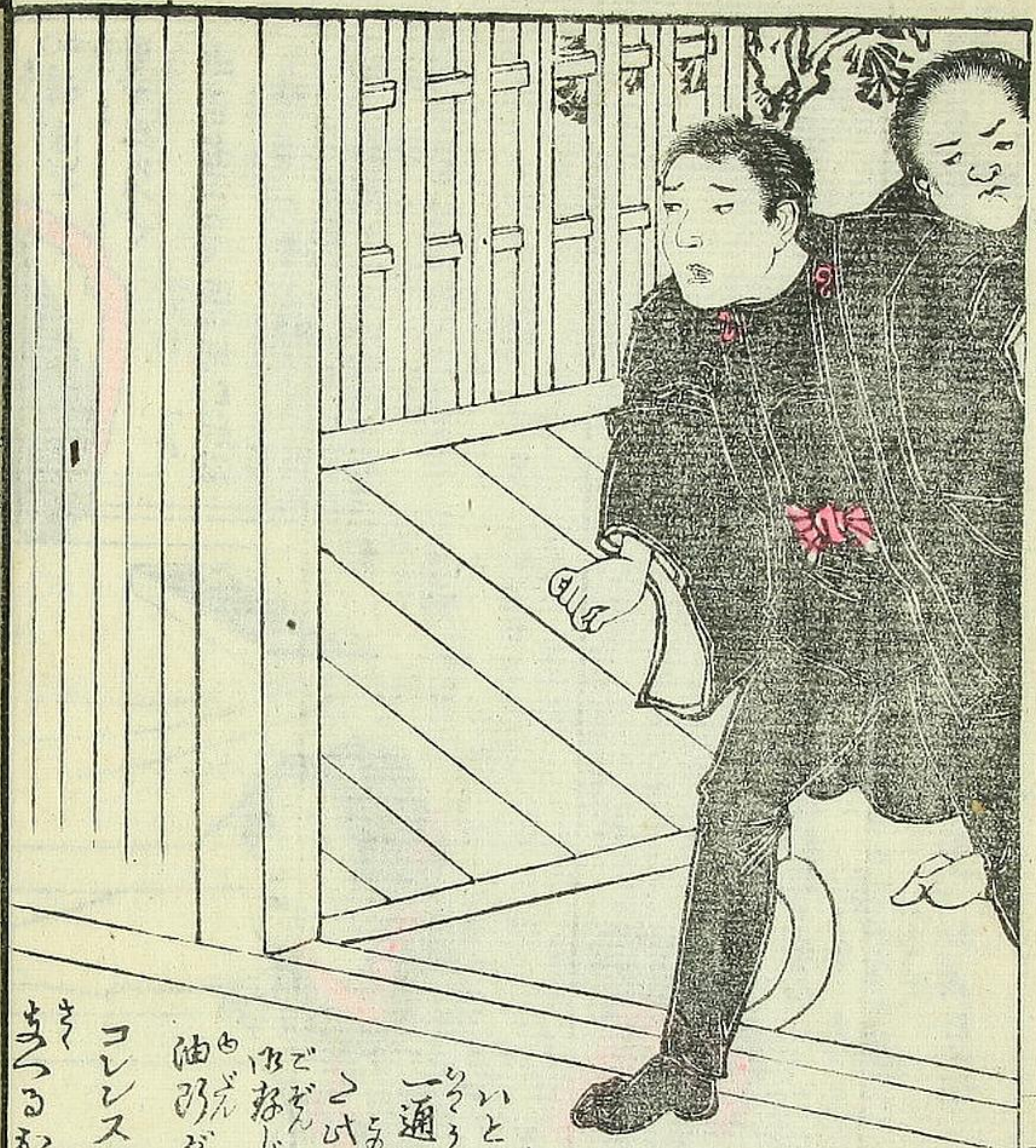


迷惑
はます
起てと撮起せ



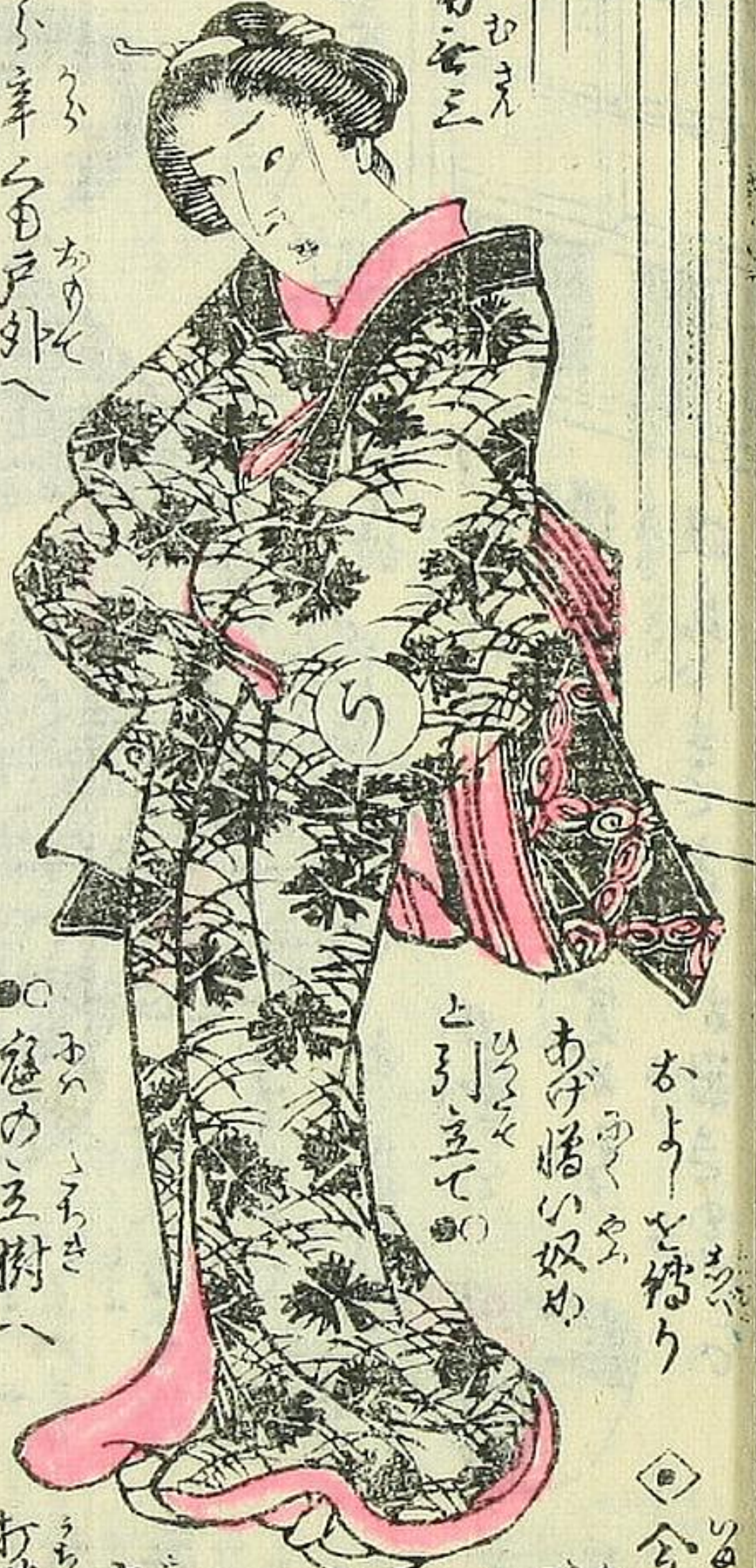
一向通せぬ熟睡の仲おの
おす
宜うのと四辺りへ
む形も何は入る招き

一掃
お
ぬつて
事
七次



合主庚のく俱か
 警あるきかよしる
 に服ッてを挿環襲
 のあのすいお例小
 と
 形ります私か他人
 一アくも荒お打擲
 いと止る情へお落ある
 一通か款いお揚テモ呆れ
 一は款出あよりさあ入
 油あがりあり是の且那
 油あがりお焚付らるる
 コレンスハ一居おまとおひ借
 まるお松と蹴倒しては入る

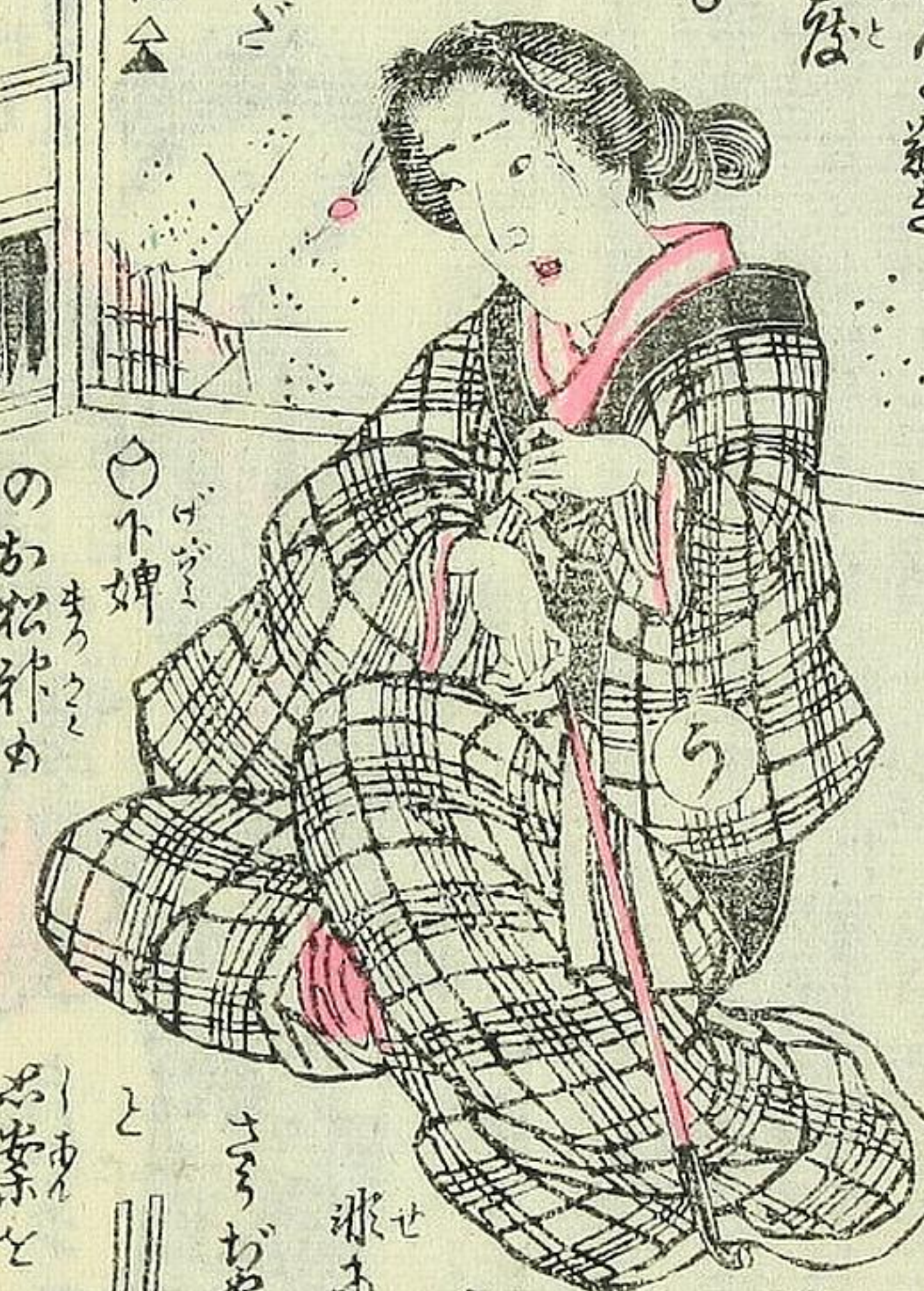
つぎを以て常い菊を三
 且那おん付うさ
 うと飯初おまと
 名をわはまを
 開け一硝不窓を幸ら由戸外へ
 虎出して何おともあく逃ありお
 コレンスハいひく後立何でもあうか
 密まおお違あのと罵しるおまを
 同よりお款い有くのうと弄こま素
 振りと及めお出さば何のり振りと
 証付のト足違いお中女のお松が合



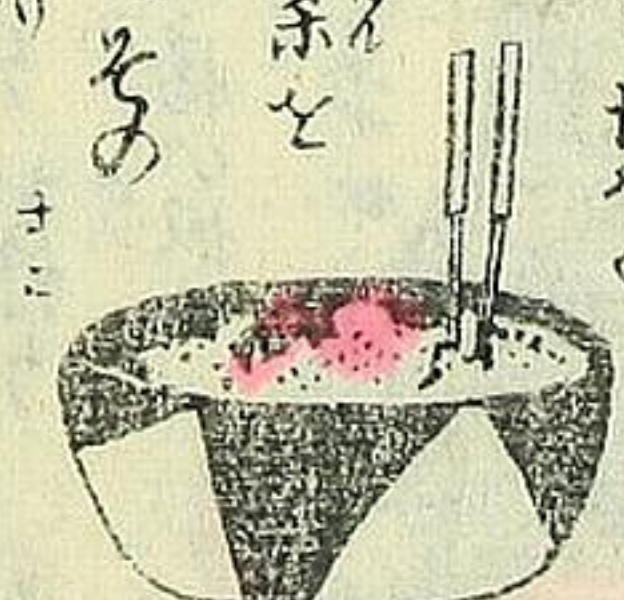
およりお借り
 あげ借の奴か
 と引立て
 窓の五樹へ
 打掃の
 合お
 有合おステツキお打んとは
 たるおりうらに雇人が証味り
 急の取利でお客振が刊ニ
 人が来ッる悪いお中といひ
 まる値一通とお芳に投付
 と款合せ

つま 莞尔のふりて出て
 ゆく松お松のおおりに
 取継り如何いせんとかき
 しが頼出お泥登
 同と付てこれ由

尖強
 か秋
 めが
 巧んご
 事に全

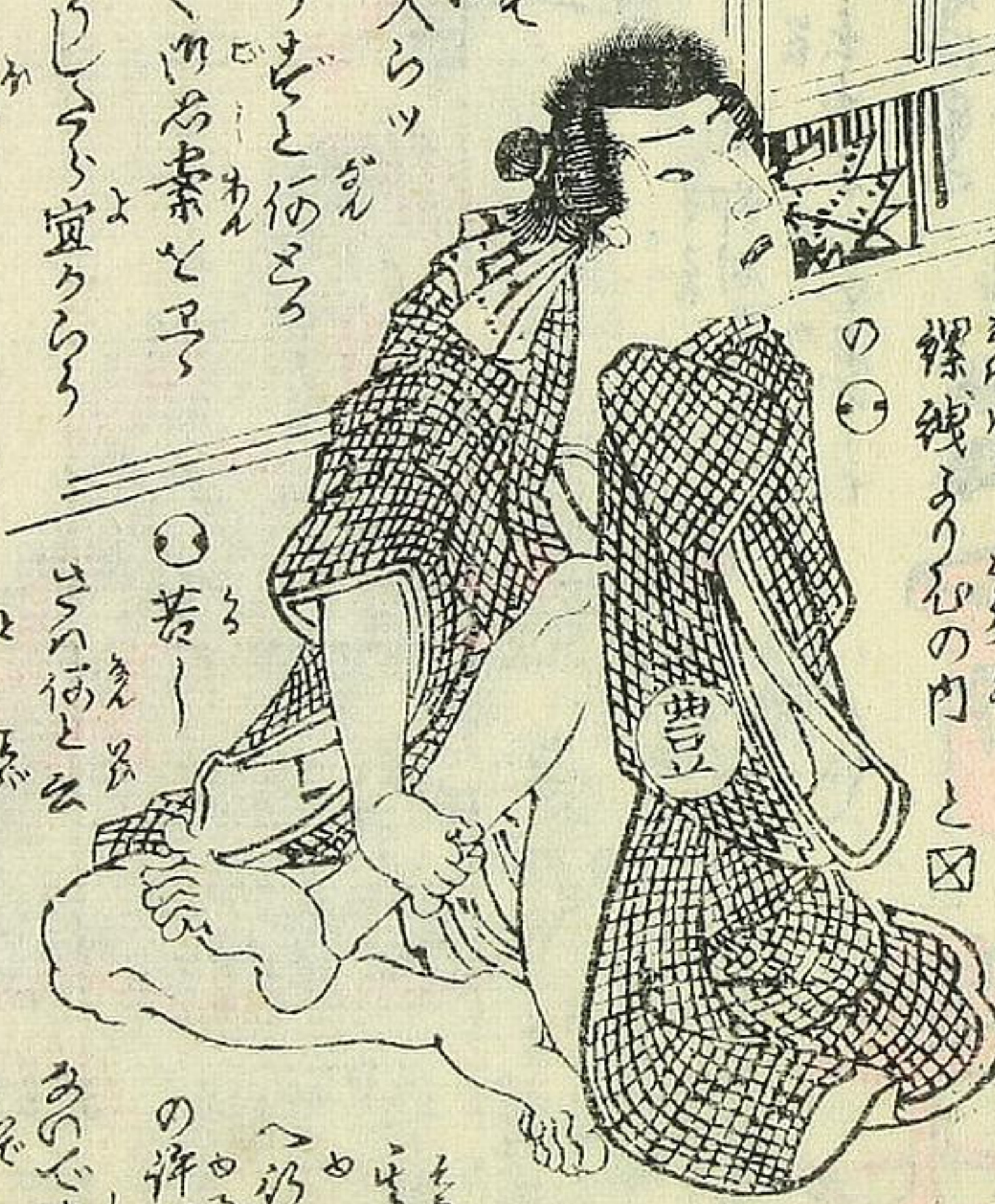


の松お松のお
 佛由まの事りと
 定めその
 お秋まの事りの



さうぢやく
 玉のる
 よりお松
 以上ハ世
 非未及む
 懐中
 確守と
 頼出せ
 玄葉て
 門と

△あひのいの
 親をさ東か付
 ひとあへん前とると
 降るの備涙おむせ
 久りのモレおよりさる
 考方おのけ揚と何と
 さられます 今も由是
 那が度らもい又何抑
 又お摺とお受あさる由



● 紐さの
 せん法々
 付り入らッ
 考方おのけ揚と何と
 さられます 今も由是
 那が度らもい又何抑
 又お摺とお受あさる由
 若く
 解く借もあく
 根入たうりに注
 人の密あれ
 此新が

【巻】

あつては内へ入るとまて 甲増くあつてまて 奉と 悔んで末梢の縄と

まてはつてあつてまて 極るあつてまて 松の鏡外へ

深とつてあつてまて 花あつてまて ことばあつてまて

尚の款差とつてあつてまて 個コレンスの

お款あつてまてあつてまて 打撃あつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

お款あつてまてあつてまて つかあつてまて

まてあつてまてあつてまて つかあつてまて

と用捨あつてまてあつてまて つかあつてまて

まてあつてまてあつてまて つかあつてまて

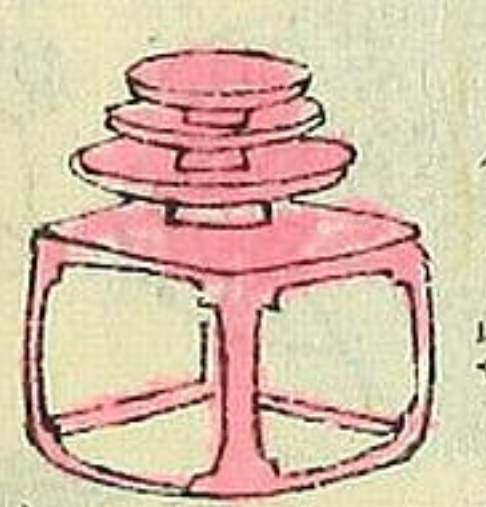
お款あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて



即同落人



あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて



あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

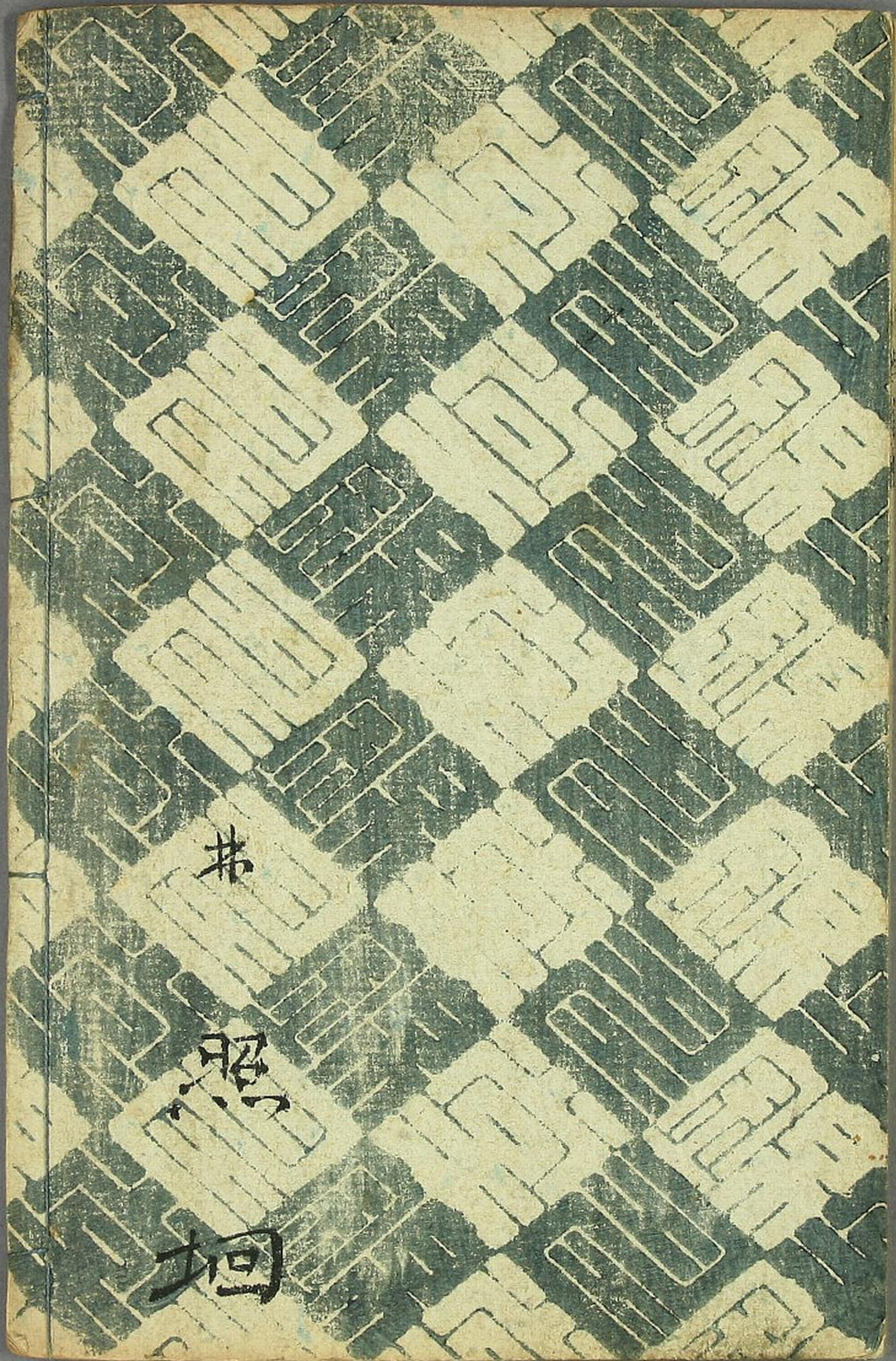
あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて

あつてまてあつてまて つかあつてまて



弗

照

廻